



屋上の空

作者：宮津怜佳

概要：大好きないすずちゃんと、いすずちゃんの隣で見上げる、屋上の空。

初夏。抜けるような青い空。

僕がいつも、道路から見上げる空は、とても遠くて狭いけど、ビルの屋上から見上げる空は、とても大きい。

こんな空を見ていると、僕は、とてもしあわせな気持ちになるんだ。
なのに、いすずちゃんは、違うのかな？

僕が側に来たことに、いすずちゃんも気が付いたみたいだ。

だけど、いすずちゃんは、頑なに僕に背中を向けたまま、俯いて、膝を抱えて、座って居る。

『いすずちゃんは、トマトが嫌いだったよね。でも、トマトはトマトなだけで、何にも悪いことはしてないんだ』

『僕は、玉葱が嫌いだけど、玉葱は玉葱なだけで、何にも悪くないんだよね』

『だから、あの人が、いすずちゃんを好きじゃなかったのも、しょうがないことだよ。いすずちゃんが悪い訳じゃないよね』

『だから、もう泣かなくてもいいよ』

いすずちゃんが、ふと顔を上げた。でもまだ、僕に背中を向けている。

『この間、ちっちゃい女の子が、僕を見て泣いたよね。その子のお母さんが、僕がおっきいから恐かったんだらうって、言ってた。確かに僕は体が大きいけど、嘔み付いたりなんかしないのに』

『でも、いすずちゃんは、僕がどんなにおっきくても、一緒に散歩してくれるよね。大好きって言うってくれるよね』

『だから、僕は、思うんだ』

『あの人は、いすずちゃんのことを好きじゃなかったけど、きっと、いすずちゃんのことを大好きな人は、いるって』

『だって、僕は、いすずちゃんのことを、大好きなんだから』

いすずちゃんが、立ち上がった。手が動いたのは、涙を拭いたからだね。

それから、いすずちゃんは、やっと僕の方を向いた。

「ごめん、ジョン。お待たせ。散歩の続き、行こっか」

いすずちゃんが笑って、僕に言った。でもなんだかちょっと、無理してるみたい。

『僕は、犬で、人間じゃないから、だから、いすずちゃんの恋人になってあげることは出来ないけど』

『僕は、僕だから、いすずちゃんが、いすずちゃんだから、大好きだよ』

僕は、いすずちゃんの顔よりもっと上を見上げた。

いすずちゃんも、つられて、上を見上げた。

おっきな、青い、空だよ。

「きれいな、空だねー...」

いすずちゃんは、そう呟いてから、顔を下に向けて僕を見た。

「ねえ、こんなに天気いいし、これから、公園の方に行ってみよっか」

いすずちゃんは、もう一度、にっこりと笑った。

今度は、元気な笑顔だ。

もう、大丈夫だね。

また少し悲しくなっても、また一緒に、ここに来ようね。

それから、屋上の空を、見ようね。

おわり